⑷　定点把握対象五類感染症の概況

ア　患者定点について（表－3／p.36，京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関（定点）名簿/p.192～195）

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関（定点）」は，インフルエンザ定点，小児科定点，眼科定点，性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており，診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

平成28年12月末の定点数は，インフルエンザ定点69，小児科定点42，眼科定点10，性感染症定点13，基幹定点1である。

行政区別定点数（平成28年12月末現在）

行政区＼定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	―
上京	5	3	1	1	―
左京	7	4	1	1	―
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	―	1	―
山科	7	4	1	1	―
下京	3	2	―	1	―
南	5	3	―	1	―
右京	8	5	1	1	―
西京	8	5	1	1	―
伏見	11	7	2	2	―
合計	69	42	10	13	1

イ　年間報告数，定点当たり報告数の推移（表－4－1～5－2／p.37～40，図－1～2／p.66）

（ア）　インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は，264．08（17，989例）であった。平成20年以降では，平成21年，平成26年，平成24年に次いで多かった。インフルエンザについての詳細は，「(1) エ　平成28年 インフルエンザのまとめ」p.5を参照。

（イ）　小児科定点

小児科定点からの11感染症の年間定点当たり報告数は，603．67（25,215例）であり，平成20年以降では平成27年に次いで多かった。上位5感染症は，感染性胃腸炎，A群溶血性レンサ球菌咽頭炎，流行性耳下腺炎，手足口病，ヘルパンギーナの順となり，小児科定点全体の86.4%を占め，最も多い感染性胃腸炎は，60．5%を占めていた。

また，過去5年間(平成23年から平成27年まで)の平均値（過去5年平均値）より多い感染症は，11感染症中7感染症（流行性耳下腺炎，感染性胃腸炎，伝染性紅斑，RS ウイルス感染症，A群溶血性レンサ球菌咽頭炎，咽頭結膜熱，ヘルパンギーナ）であった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の過去5年平均値との比 ( )内は前年比
インフルエンザ	17, 989	264.08	1. 25 (1. 77)
RSウイルス感染症	797	19.04	1.01 (0.78)
咽頭結膜熱	817	19.55	1.47 (1. 32)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	2, 495	59.89	1.15 (0. 96)
感染性胃腸炎	15, 246	365.18	1. 25 (1. 26)
水痘	651	15.61	0.42 (0.89)
手足口病	1, 178	28.05	0.44 (0. 21)
伝染性紅斑	383	9.23	1. 04 (0. 49)
突発性発しん	775	18.54	0.96 (0.96)
百日咳	10	0.24	0.71 (0. 76)
ヘルパンギーナ	1, 081	25.75	1. 07 (1. 66)
流行性耳下腺炎	1, 782	42.59	4. 45 (3. 04)
合計	43, 204	867.75	—

(ｳ) 眼科定点

眼科定点からの2感染症の年間総報告数は158例であった。

定点当たり報告数は，急性出血性結膜炎が0.10，流行性角結膜炎が15. 70で，どちらも前年に比べ減少した。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と過去5年平均値との比 ( )内は前年比
急性出血性結膜炎	1	0.10	0.21 (0.33)
流行性角結膜炎	157	15.70	0.53 (0.77)
合計	158	15.80	—

(ｴ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は463例であり，その内訳は，性器クラミジア感染症266例，性器ヘルペスウイルス感染症105例，尖圭コンジローマ54例，淋菌感染症38例であった。前年比は，性器クラミジア感染症 1. 16，性器ヘルペスウイルス感染症 1.24，尖圭コンジローマ 1.06，淋菌感染症 0.79であり，淋菌感染症を除く3感染症で前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と過去5年平均値との比 ( )内は前年比
性器クラミジア感染症	266	20.46	0.94 (1. 16)
性器ヘルペスウイルス感染症	105	8.08	1. 04 (1.24)
尖圭コンジローマ	54	4.15	1.12 (1.06)
淋菌感染症	38	2.92	0.78 (0.79)
合計	463	35.61	―

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は8感染症あり，そのうち2感染症で報告があり，年間総報告数は9例であった。

ウ　月別の報告状況（表－6－1～表－10／p.41～49，図－3／p.67～68）

感染症発生動向調査における平成28年の報告週対応表は，＜表－1／p.29＞に示すとおりである。また，週単位で報告される感染症の月別集計は，対応表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は，2月（151. 38），3月（56.79），1月(24.41)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は，11月，12月，5月の順で多く，報告数が少なかったのは，3月，9月であった。感染症別報告数の月別1位は＜表－10／p.49＞に示すとおり，年間を通して感染性胃腸炎であった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は，＜表－6－2／p.42＞に示すとおりである。

エ　年齢階級別の報告状況（表－11－1～14－2／p.50～57，図4－1～4－4／p.69，70）

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合のうちでは，0～9歳が8，531例で全体の47. 4%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は，1歳が最も多く16. 0%を占め，以下2歳 11. 2%，3歳 9. 8%の順であり，4歳以下が総報告数の54.5%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は，0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位（0～5箇月はRSウイルス感染症が1位）であり，2位は，0～5箇月では感染性胃腸炎，6～11箇月ではRSウイルス感染症，1歳～4歳では手足口病，5歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は，30～39歳が29. 1%と最も高く，次いで0～9歳が15. 8%，40～49歳が12. 0%であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は，20～24歳が26. 1%，25～29歳が17. 5%，30～34歳が11. 4%，35～39歳が10. 4%，40～44歳が9. 7%の順であり，20～44歳が75. 2%を占めた。

オ　行政区別の報告状況

行政区別の報告数，行政区別の定点当たり報告数，感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は，＜表－15－1～18－2／p.58～65＞に示すとおりである。